妊娠と出生前検査の経験についてのアンケート調査 2013 (4)

――母体血清マーカー検査と羊水検査の経験――

○電気通信大学　菅野摂子
東京大学大学院総合文化研究科　渡部麻衣子

1. 目的

2012 年 8 月に NIPT (Non-Invasive Prenatal Diagnosis)の臨床試験開始が報じられて以降、出生前検査をめぐる議論があらためて続いている。社会的関心の高まりを受け 2013 年には日本産科婦人科学会より指針、関連諸学会から共同声明が出された。本報告は、出生前検査を利用する妊婦がこれまで検査をどのように経験してきたのかを明らかにすることを目的としている。そのために、ここでは 1994 年に臨床応用された母体血清マーカー検査と 1970 年代より利用されている羊水検査における妊婦の経験を、特に胎児にある障がいについて知ることへの意欲と情報環境の変化を軸として論じる。

2. 方法

「妊娠と出生前検査の経験についてのアンケート調査(1)(2)(3)」(田中・石黒、二階堂・柘植、井原・白井)と同様に、首都圏(都内および神奈川県)の 14 私立保育園と都内の子育て支援施設において、2013 年 7 月に施設を通して調査票を配布、郵送にて回収した。378 票(有効回収率　59.7%)を分析対象とした。本報告では、母体血清マーカー検査および羊水検査に関する設問への回答を、特に胎児の障がいへの関心と情報取得行動に焦点をしぼって分析した。また 2003 年に実施した同様の調査(2003 年調査)の結果とも比較した。

3. 結果

母体血清マーカー検査について、医療機関に行く前に情報を得ていた人は 2 割弱、情報を入手した媒体としてはインターネットが最も多かった。一方羊水検査については、約半数が医療機関に行く前に情報を得ていたと答えており、情報入手の媒体は書籍がインターネットよりも若干多かった。2003 年の調査ではインターネットという回答は少なく、妊婦の情報取得方法に変化があったことが示唆される。一方、医療機関で医療者から説明を受けたという人は、母体血清マーカー検査では 2 割、羊水検査では 3 割にとどまった。実際に検査を受けた人は母体血清マーカー検査の方が羊水検査よりも多かった。自由記述から抽出された出生前検査に対する妊婦の意見は多岐に及んだが、2003 年調査の結果と比較すると、羊水検査に関しては「胎児の状態を知ること」に対する肯定的な意見が増え他の人が受けることへも寛容になった。しかし、「中絶したくない」「結果によっては不安になる」といった理由から受検に至らない人たちも多くいた。

4. 結論

出生前検査についてインターネットからの情報取得が増え、胎児の障がいを知ることへの意欲が高まる中、医療機関で検査について説明を受ける人は、母体血清マーカー検査、羊水検査も少数にとどまっている。この背景には「医療者は検査について妊婦に伝える必要はない」とする指針の存在があるが、NIPT の登場以来、メディアを通じて出生前検査に関する情報に触れることは不可避となっている。今後、出生前検査に関する情報取得環境が、受検に対する意識にどのように影響していくのかさらに検討を続けたい。

付記：本研究は、科学研究費助成事業　基盤（B）（研究課題番号：25283017　研究代表者：柘植あづみ）の成果である。